

6月22日(月)にIFERIセミナーで「20世紀初頭の中欧とパン・ヨーロッパ運動—人物史から構成する国際関係史—」と題して、20分間の発表を行なった。

発表では、欧州統合とはなんなのか、という問いかけから、欧州統合の原点ともいえる「パン・ヨーロッパ運動」に焦点をあてた。

パン・ヨーロッパ運動とは、日本人とオーストリア人のハーフであるクーデンホーフ・カレルギーという人物が第一次世界大戦後の1923年から開始した欧州統合運動である。今回の発表では、この運動のクライマックスである1946年から1948年の間にクーデンホーフとイギリスのチャーチルとの間で交わされた往復書簡を紹介しながら、その本質に迫った。

第二次世界大戦による欧州の経済的・政治的な没落やソ連の脅威が迫るなかで、欧州統合運動はかつてない盛り上がりを経験する。その盛り上がりのきっかけとなったのが1946年9月19日にチューリッヒ大学でチャーチルが行なった「合衆国演説」であった。「欧州の復興のために、ヨーロッパ合衆国のようなものを創らなくてはならない」、という彼の発言は欧州諸国の政治家たちに強い衝撃を与えた。

実はチャーチルはこの発言の少し前、あらかじめ当時最大の欧州統合運動である「パン・ヨーロッパ運動」を組織していたクーデンホーフとチャートウェルの自宅で面会をしていた。ここで、二人は欧州統合の実現の為に協力することを約束していた。

しかしそれにもかかわらず、こうした重要な時期に欧州統合運動を担うクーデンホーフとチャーチルの間で交わされていた往復書簡には、意外なことに欧州統合の道筋や、理念といったものは全く書かれていないのだ。往復書簡から読み取れるのは、欧州諸国の国会議員、労働組織、教会組織などの各国の有力者たちをどれだけ自分の支持者として取り組むかという支持基盤の争奪戦であった。クーデンホーフとチャーチルは欧州統合という舞台上で協力するどころか、上記のような権力闘争を繰り広げていたのだ。

このあまりに不可解な言動こそが、むしろ欧州統合の本質を露骨にあらわしている。欧州統合運動で主導権を握れば、アメリカとソ連に挟まれた欧州の指

導者となることができるのである。この地位は、アメリカとソ連の双方から利益を引き出すことができる強大な政治権力となりうるのである。

以上のような生々しい現実には、特定の概念や理論で説明することは不可能である。クーデンホーフやチャーチルは政策決定過程モデルなどの政治学が提示する規範概念に従って行動することはないのだ。

こうした人間の不合理な感情や怒り、嫉妬などが渦巻く現実こそ「異分野融合」そのものである。そうした現実を忠実に調べ上げ、描くことは「異分野融合研究」となるのではないだろうか。

指定討論では、クーデンホーフが日本人とオーストリア人のハーフであることから、日本との関係を論文に盛り込む提案をしていただいた。

また、欧州統合とはなにかという問いかけが、まだ弱いという指摘に加え、現在の EU は理念がしっかりとしているが、その出発点となる欧州統合運動で理念が無視されていたということはおかしいのではないかと指摘をして頂いた。

最後の点に関せば、筆者は現在の EU が理念がしっかりとしているという見方そのものに疑問を感じている。現在の EU はむしろ明確な理念が無く、行政の積み重ねの結果であると考えている。そう捉えれば、欧州統合は、はじまりの時点から理念が欠如していたと考えることができるのではないだろうか。

他にも多数の意見、感想、指摘をいただいた。それらを生かしながら、今後の研究を進めて行きたい。
ありがとうございました。

最後に、史料に関する説明が不足していたとの指摘をいただいたので、この場を借りて簡単な説明をしたい。

発表で用いた史料はスイスのジュネーブ大学ヨーロッパ研究所に保管されている 1938 年以降のものである。クーデンホーフは様々な人物に手紙を送っており有名なところでは、アデナウアー（49 年から 62 年まで文通）、ムッソリーニ（23 年と 40 年）、ベネシュ（39 年から 46 年まで）らとの往復書簡が残されている。今回は特にチャーチルとその側近であるダンカン・サンディスと交わされた往復書簡を用いた。この二人とクーデンホーフは、46 年から 49 年までに数十通に及ぶ文通を英語で行なっていた。